

自由討議

横井：それでは休憩を終わりました、自由討議に入りたいと思います。立て続けに4本の報告がありましたので、どの報告に対する質問でも構いません。ぜひご質問のある方、画面上で手を上げられるか、挙手マークを付けていただけるようにお願いします。それではまず最初に会場にいらっしゃるAさんからご質問、ご感想いただければと思います。よろしく願いいたします。

A：これまでに何回か、このような会合に出席しておりますので、皆さんがおっしゃることについてはある程度、理解ができるのですが、実は今日、出席をして、私が初めてだと思えますことは、電通の長瀬さんがおっしゃったこと。これは私には理解に苦しむところでしたので、とりわけ文学部の小林先生が総括をされて、今後、『同志社百五十年史』をお出しになるにあたって、一番、影響力のある長瀬さんとの関係、理解の深さを図っていただく必要があるのではないだろうかと思いました。以上が感想です。

横井：ありがとうございます。小林先生、あるいは長瀬さん、今のご質問というか、ご感想に対して何かありますでしょうか。小林先生、お願いいたします。

小林：ご感想ありがとうございます。実は内情を申しますと、150周年記念事業という全体の中で、電通にお願いしている部門と、それから『百五十年史』編纂事業の部分というのは、完全に役割分担していますので、私どももかるたとか賛美歌とかという事業について、あまりご意見、申すこともないのですが、逆にそちらの方からこちらにご意見がくるという関係でもなく、役割分担が非常にはっきりしております。ですので、もちろんアドバイスはいろいろな形でいただければと思っておりますが、『百五十年史』は『百五十年史』で肅々と作業できると思っております。電通さんの方につきましては、電通さんから。

長瀬：そうですね。われわれが今、お手伝いさせていただいているのは、同

志社の未来を考えましょうというポイントで、恐らく今、小林先生がおっしゃったとおり、編集事業の方は歴史をまとめる方に、たぶん重きを置いておられると思います。これはこれで大事なことだと思いますし、ただ一方で150周年をお祝いするというのも大事なのですけれども、ここで止まるということではなくて、200年だったりとか、その先、300年というところを見据えて、今の同志社がやるべきことは何だろうかということを考えることを、電通としてはお手伝いをさせていただいているというのが、われわれの役割かなというふうに思っております。

A：今日、お会いしたのは、私にとっては初めてのように思うのですが。

長瀬：初めてお会いさせていただいたかなと思います。

A：そうですか。僕は、電通および長瀬さんと、それからわれわれのリーダーである小林先生との関係がより密であることが、今回のこの仕事には極めて重要であるというように理解をしていたのですが、あなたがおっしゃることが、僕には、距離も離れていることもあって、少々、理解がしがたい面がありましたので、先ほどの発言をいたしました。

横井：ありがとうございます。ぜひ、Zoomでご参加の皆さまの方から、ご質問ございませんでしょうか。素朴な質問でも構いませんので、ぜひお願いいたします。

そうしましたら少し私の方から、補足というわけではありませんが、実は今回の150周年記念事業のお手伝いと言いましょか、プロポーザルということで、企画等のご提案をしていただいて、その中で競争入札をさせていただいたのですが、実は電通さん以外に3社、全部で4社のご提案をいただいた中で、電通さんをお願いすることにしたのですが、この電通さんのご提案の一番の特徴は、未来創造プロジェクトのチームに現れておりますように、学校法人同志社が企画等について丸投げをして、業者の皆さんが決められたことをやるということではなくて、全学、そして周囲の方々、卒業生、長瀬さん自身も同志社のOBでいらっしゃるんですが、卒業生ですとか地域ですとか、さまざまなものを巻き込んで、150周年、そして200周年に向けて同志社の姿というものを発信していこう、こういうご提案でありました。

他のところは例えば、どこかは申しませんが、国際会館に天皇、皇后両陛

下をお迎えして、150周年記念事業を大々的にやるのだというような企画ですとか、さまざまあったわけですが、電通さんのご提案の最大の特徴は、電通はノウハウのお手伝いですとか、企画等でご協力いただくとか、そういうことでありまして、われわれプロジェクトのメンバーが中心になって、150周年に向けて、しかも150周年の創立記念日当日の豪華な式典ではなくて、毎年のように、Doshisha New Dayを開催するというのがその象徴だと思いますし、150年、そして200年に向けてさまざまなプロジェクトを続けてやっていこうということが、大きなご提案の柱だったと思います。それに基づいて、未来創造プロジェクトのチームがそれぞれ、各校から立候補して集って、それぞれ広報チームですとか、企画チームですとか、そういったチームに分かれて、それぞれ担当のプロジェクトを進めていく。こういうことで2年目を迎え、長瀬さんをはじめ電通の皆さまには大変お世話になっているところであります。プロジェクトの進行にあたって、さまざまなノウハウを伝授していただいたりしています。

『同志社百五十年史』の方は、今日、小林先生からご発表がありましたが、これはもうこのプロジェクトのもっと前から、準備が進んでいるところで、今回、通常の周年史と違うところは、これは現在ある全ての部局ということでもよろしいでしょうか、つまり法人内に含まれております各学校、園以外にも、例えば特に大学、女子大学は大変大きい組織ですので、それぞれの学部、あるいは事務の部署、そういったところ全ての部署についての歴史ですとか、現状についてのページが設けられるということになっております。それが最初に発刊されて、その後、通史の方が続き、三巻からなる『百五十年史』が編纂されるということで、こちらも法人のもとに編纂室が設けられて、実は私どもの研究室がある良心館の5階でしたか、4階でしたか、編纂室が設けられています、そういうことで、こちらも早くから活動を始めていらっしゃる、着実に編纂が進んでいるところだと思っております。大まかではあります、補足をさせていただきました。どうぞ、小林先生、お願いいたします。

小林：ご紹介いただきましてありがとうございます。場所の件だけ、補足を。編纂室は有終館にございます。

横井：良心館の4階にも、西村卓先生の研究室ですか、編纂室というので看板が掛かっておりますが。

小林：それは恐らく経済学部のご配慮で、経済学部の部門を今、考えておられるのだと。

横井：そういうことですか。それは失礼いたしました。私の早とちりで。

小林：西村先生がそこまでされているとは、私、今、初めて知りました。

横井：そうですね。良心館の研究室、そのまま『百五十年史』編纂室となっております。

小林：そうですね。

横井：看板に偽りありでしたかね。私の見間違いかもしれないです。

小林：いえ、それはそれでありがたいです。

横井：失礼いたしました。そのような形で、150周年に向けて進んでおります。曜日が年によって違いますので、土曜日や日曜日の方がいいかなという気もしておりますが、Doshisha New Day を毎年11月29日の創立記念日に行う予定になっております。このようにして150周年に向けて機運を盛り上げていこう、そして周囲を巻き込んでいこう、そういうことであろうかと思えます。そういうイメージで進んでおります。

お聞きの皆さま、Zoomでご参加の皆さま、こういったことも150周年記念事業で取り上げたらいいのではないかと、そういったようなご提案でも構いませんので、ぜひご意見等、お寄せいただければと思います。いかがでしょうか。挙手マークか、実際にお手を上げていただければと思います。

B：横井先生。

横井：Bさん、お願いします。

B：よろしいですか。今、創立150周年記念事業ということについて説明を聞き、そしてその内容のところで、同志社の未来建設のためにということで、もう法人内の幼稚園、大学、大学院を含めた全14の学校から集まった、同志社未来創造プロジェクトが結成されたと、これは素晴らしいことですね。これからいろいろなことを企画され、全同志社が一丸となってというのは、すごく希望を感じました。

今、発言したいと思ったのは、『同志社百五十年史』の編纂事業内容の中

に、調査活動の柱というので、新島襄関係の文書をはじめとする個人提供資料の収集、整理、解説があります。僕も新島襄の足跡をたどるということで、『新島襄全集』をもとに、仲間たちといろいろ、15コース、国内12で、海外三つというところで調査をしました。

その中で、新島先生、すごく細かく記録をつくっておられて、本当に感心するのですが、同時に、例えば南九州編の宮崎、都城、鹿児島というところで、新島の日向伝道には不明なことが多い。僕もずっと調べていったら、新島襄の雑記帳の中にそのメモを発見して、たぶんこうじゃないかなということを発表させていただいたのですが、今までいろいろな人たちが研究、発表をされていて、『新島襄全集』のここについては、新たな資料でこういうことが分かったよとか、そういうことを、なかなか編集員が集めるというのは大変ですから、皆さんにどうぞ応募してくださいとか、ご連絡くださいとか、資料を付けてね、というふうに、幅広く新島研究をされている人に呼びかけられたらどうか。そこを吟味して、可能なものは、例えば注釈のところに入れるとか、いろいろ、少しでも150年という大きな節目でできたらいいなと思いました。以上です。

横井：ありがとうございます。小林先生、何かございますでしょうか。

小林：ありがとうございます。いつも情報ありがとうございます。今日も、会場にももちろんご専門の先生もいらっしゃいますし、日頃から情報提供いただいているのですが、第一部門研究会に関わっている先生にも、編集委員会に参加していただいていますので、いろいろな形でまた今後も情報提供、お願いする機会があると思いますので、ぜひその時はご協力のほど、よろしくお願いいたします。

横井：ありがとうございました。他、いかがでしょうか。実は今日、このようにして第一部門研究会で150周年記念事業についてご報告いただいたのは、今のように、例えば150周年記念誌、『同志社百五十年史』の方にこういったことを載せたらどうだろうか、こういう情報があるということをやぜひお寄せいただきたいということがあると同時に、ぜひ皆さまの方で何かお考えでいらっしゃるプロジェクトと言いましょうか、そういったことについて、この150周年記念事業と関連付けて、より幅広く150周年というもの

を、皆さまに知っていただきたい、そういう思いがあるからです。そこで、今日、創立 150 周年記念事業事務室の平野事務長もおみえですので、実際そのような形で、持ち込み企画と言ったら語弊があるかもしれませんが、150 周年記念事業にぜひこのような形で参加したいというご希望をおもちの方、いらっしゃるかもしれませんので、何かそのような形で 150 周年記念事業の冠というのでしょうか、そういったものが付くような形で何かできることがある、あるいはそういったことがあったということでしたら、少しご紹介願えたらと思いますが、いかがでしょうか。

C：C ですけど。

横井：どうぞ。

C：素晴らしい計画、いろいろ聞かせていただいて、ありがとうございます。この中の中心は、やはりキリスト教主義ではないかと思います。キリスト教主義というものを 4 年間の間でみんな学んでいく、少し触れていく機会を少しでも増やして卒業していただきたいと思います。そのためにも、いろいろな学校がございまして、学校自体がやはり愛をもった姿勢で学生や生徒に接することによって日々、キリスト教主義に接することができると思います。

ということで、オール同志社の各学校が、近くの人を大切にすること、キャンペーンを張っていただいて、まず自らがキリスト教主義の行動をとるということを、この機会に全学、集めて、みんなで近くの人を大切にすることはどうか、各学校が考えて実行することが、キリスト教主義を理解し、そしてそれが学生にも、生徒にも伝わっていくのではないかと思います。もちろん、学校当局としてはいろいろ考えておられると思いますが、先日、そのような趣旨で提案書を出させていただいておりますので、ご検討のほど、お願いをしたいと思います。以上です。

横井：ありがとうございます。とても大事なことをご指摘いただいたと思います。周年事業もちろん大事ですけれども、日々の教育の中での新島の思いですとか、キリスト教主義というものの浸透、あるいは理解を図ることが同志社にとって大切なことだなというのはあらためて感じているところです。森田先生、むちゃぶりでですけど、キリスト教文化センターの教員でもい

らっしゃいますので、お願いいたします。

森田：ありがとうございます。本当におっしゃるとおりです。キリスト教主義というのは、もちろんキリスト教自体に触れる礼拝であったり、同志社科目というものを大学では設置しておりますけれども、そういうものにぜひ触れ、そして履修をしていただけるように、全学的に履修を1回はしてもらえるようにということを願って、いろいろ進めていますけれども、そういったことだけではなくて、どの教育の現場、それがキリスト教の科目でなくても、全ての同志社での教育、研究活動の場面において、私たちが、まさに新島先生が一人一人を大切に、そして一人のために涙したそのことを、どこを切り取っても出てくるようにしていくというのが、本当に同志社に、これからあらためて大切になってくることだと思います。それを言うのは簡単なことですが、実際、どうやってそういったものを共有していくのかということについては、まだまだ全学的なしかけというか、学びの機会というものが必要だと私は思っておりますので、そういったことを、この150周年ということを大切な良い機会として、私も皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。ありがとうございます。

C：そのことについて、提案書を出しておりますので、それでキリスト教主義という大きなタイトルで動こうとすると動きづらい。それはやっぱり具体的に愛とか、近隣、近くの人に親切にというレベルに落とすと、いろいろなことが見えてくる。入学式の時に、入学者に対して何をなすべきか。父兄に対してどうすべきか。それから、またカリキュラムの編成の時、どうすべきか。学生が事務局を訪ねた時に、事務局からどんな対応を受けるのか。そういうところで、事務局やら担当から受ける温かいものに触れて、やっぱり同志社に来たのかと、キリスト教主義の学校に来たのかということが、人を通じて分かっていただくということがいいと思います。もちろんチャペル・アワーも結構ですし、雑誌も結構ですが、やはり人を動かすのは人ですので、人を通じてやると。そのためには同志社の教職員が、まずキリスト教主義的な行動をとっていただくよう、まず展開をしていただく。それをご提案しておりますので、よろしく申し上げます。

横井：ありがとうございます。それでは先ほど平野事務長、むちゃぶりを

しましたが、ご提案とかそういったことについてご紹介いただければありがたいと思います。

平野：初めまして。学校法人同志社の法人事務部、創立 150 周年記念事業事務室の平野と申します。実際には今、C さんからもお話がございましたように、こちら、事務局の方には今、80 件ほどのご提案がございまして、未来創造プロジェクトチームの方で、その内容は全て披露させていただいて、どうしても限られた予算の中で、限られたスタッフの中でやっておりますので、全ては実現できないのですけれども、鋭意、努力しておりますところでございます。

具体的に少しだけ、動きつつありますプログラムをご紹介させていただければと思います。11 月 29 日の Doshisha New Day というイベントですけれども、昨年は残念ながらコロナの関係でオンラインのみとなりました。今年は何とか対面で、大学の寒梅館の方で行いたいなと思っております。プログラムの一つですけれども、先ほどございましたオリジナル賛美歌に曲が付きまして、そこで披露したいなど。オール同志社でこの歌を共有したいということで、今、女子大学の音楽科の先生方による披露、プラス 4 中高と言いますか、保護者のコーラス部さんの方にもお声掛けをして、オール同志社での取り組みにしたいなと思っております。

あと少しずつ紹介させてください。同志社・新島かるたの方、少しずつ浸透をしているのですけれども、また皆さんの方からもご紹介をいただければ幸いです。学内であればハリス理化学館の同志社グッズの販売コーナーで、一つ、税込み 1,100 円で購入できますし、同志社エンタープライズのホームページからも購入できますので、ぜひ PR いただければ幸いです。

あと同志社中学校の生徒の方が、キリスト教主義であったり、新島先生の生涯についてのプロジェクトマップを作らして、大学の皆さんに紹介したいということで、11 月 22 日、大学の今出川キャンパス、良心館、あるいは彰栄館に投影する計画をいただいております。

もう一つ、二つぐらい、すみません。新島先生のゆかりの地で、いろいろなイベントを行いたいなということで、青森県に風間浦村というところがご

ざいます。新島襄、寄港の地、その碑前祭を毎年、行っているのですけれども、今年が30周年ということで、風間浦村の方で10月の30日の日曜日がいろいろなイベント、31日が碑前祭というプログラムで、今、企画が進んでおります。30日のプログラムの中では、本井康博先生によるご講演をいただいたり、あるいは卒業生の、シンガーソングライターの伊藤誠さんによる演奏、そのバックでバイオリンとかピアノは女子大学の音楽科の卒業生の方にご協力いただくようなことになっております。

最後になります。これ、リクエストもございますのですけれども、能楽部のOB会さんが中心となって、『庭上梅』というものを、今までも周年事業で行ってまいりました。能楽部のOB会の方から、150周年でぜひ行いたいと、能楽部結成100周年という年に当たり、ジョイントでやりましょうということで、学校法人同志社、そして能楽部紫謡会様ですかね、費用を持ち合って、実際に行うということにもなっております。少しずつですけれども、150周年記念事業を皆さまに知っていただいて、知っていただくだけではなくて、ぜひ一緒にいただいて、盛り上がっていききたいなと思っております。どうぞ今後ともよろしく願いいたします。

横井：ありがとうございます。それからチャットの方でご質問が入っているのを確認しましたので、お聞きしたいと思います。小林先生にですが、『百五十年史』の調査活動において、京都府庁や京都新聞での資料収集にまず着手するとの報告がありました。役所やメディアの文献調査などは二の次、三の次ではないでしょうか。まずは同志社内部でいかに考え、どういう意図で同志社が動いたのかと、その評価が重要ではないのでしょうかとの質問が出ております。よろしく願いいたします。

小林：ありがとうございます。どなたか分かりませんが、ありがとうございます。おっしゃるとおりでして、今、並行して進めていますのが、例えば大学の各学部が持っている記録類の調査ですとか、あるいはもともと社史資料センターがそういったアーカイヴ機能をもっていますので、その収集活動を行っております。そこが、実はこの『百五十年史』と、それから以前に行われた『百年史』との大きな違いでして、『百年史』のときにはそういったよりどころがない中で、手探りで始められた、そういうふうなご苦労をさ

れたと思うんですけども、『百五十年史』は社史ですとか、女子大の史料センターの調査活動の基礎があって、編纂室ではそこで普段、行えていないものをフォローしていこうというのが、先ほど申した趣旨です。ですので、社史や女子大学などで行われてきている資料収集活動の成果は、もちろんこの編纂事業の根幹になると思っておりますので、今そういった協議を進めているところです。ありがとうございます。もしまだご質問ありましたら、お聞かせいただければと思います。

横井：ありがとうございます。他に何かございますでしょうか。ぜひ、先ほどのようなご提案でも構いませんし、ご質問でも構いません。この150周年記念事業に向けて、お願いいたします。

D：一つ質問があります。

横井：Dさん、お願いします。

D：150周年に向けては非常にいい、歴史があると、『百五十年史』は素晴らしいと思います。かるたの発表、賛美歌の発表、いろいろ面白い企画がありますが、私は同志社の『百年史』を時々、使っていますけれども、もう少しあったらうれしいということが二つあります。一つは年表ですね。『百年史』に年表がないのです。いつ、何が作られたとか、いつ何ができたか、全体を把握しやすいのは年表ですね。目次を読んでもこれあったかなと、いつ何が、どういうふうになったかは分からないので、年表があると非常にうれしいです。

あともう一つは、基本データですね。基本データは、例えば10年ごとに学生数はどのぐらいだったか。また教員数はどのぐらいだったかとか、あと建物、どういう建物があった。それがあって、非常にありがたいのです。そうすると、同志社がだんだん大きくなること、より把握しやすいのではないかと思います。

もう一つは、写真、もうちょっとだけあれば、あと図がもう少しあれば、こういう人はこうだった、基本的には、歴史はストーリーテリングと、私は認識していますので、『百年史』、それを読むと、いろいろなことが分かりますので、非常に役に立ちますが、その年表と基本データがもうちょっとあったらありがたいと思いますので、今度の『百五十年史』にはそれが入れば、

非常にありがたいです。

横井：ありがとうございます。小林先生、お願いいたします。

小林：ありがとうございます。まず、図版などをもっと充実してほしいというご意見、恐らく皆さんそう思っておられると思いますし、私も同感です。今、考えております、まだ公表できるかどうか、予算の関係もありますけれども、かつての図書はやはりカラーで作成する場合と、白黒で本を印刷する場合では、かなり費用の差がありましたので、『百年史』はもちろん白黒の本なのですが、できればオールカラーで、カラー写真はそのまま掲載できる形にしたいなど。もちろんまだ希望の段階なのですが、ですから、収集できた写真はかなり使いやすくなるのではないかなど、その時には、と私も期待をしているところです。

あとは、これも準備委員会の時から、いろいろな方からご意見いただいていまして、年表作成するとか、基本データを充実させるとか、まさにそれもおっしゃるとおりで、印刷物としての『百五十年史』は2025年、2026年、2027年の間に発行するしかないのですが、その範囲の中で出来上がったものを印刷物として発行することになるとは思います。また、もしかしら作業を進めていく中で、編纂には間に合わないけれども、3年後、5年後に新しい事実が発見されることもありますので、印刷物とは別に日々、更新していくような形での年表とか、基本データのようなものは並行して、編纂事業の中での成果としてデータを残して、どこかで公表、公開、ホームページなどで公開できるという形もあり得るかなと思います。これももちろん、まだ私の希望の段階ですので、まずは印刷物がどういう形になるかと。その中の付録がどの程度の余裕があるかという中で、今のご意見もまずは考えさせていただきますと思っています。ありがとうございました。

D：ありがとうございます。

横井：そうしましたら今、会場にいらっしゃる太田事務長から手が挙がりましたので、お願いいたします。

太田：同志社社史資料センター事務室の事務長をしております太田と申します。今Dさんのご質問に関連することかと思っておりますので、少しだけ私の方

から補足させていただきたいのですけれども、今、実は『百五十年史』の編纂の関係で、財政のことについて、社史の調査員が調べております。同志社と財政ということで、同志社ができてから今までの財政のことに关しまして、基本的なデータ、統計というものをとっているところがございます。これを生かして、来年度、その有用な企画展ができればなど。まだ、具体的には、詰めてはいないのですけれども、来年度にハリス理化学館の同志社ギャラリーにおきまして、そういう企画展をしたいなど。同志社と財政ということに關連する企画展をしたいなどということで考えておりますので、もしそれができましたら、また皆さま方にもご覧いただけたらと思います。以上でございます。

横井：ありがとうございます。Zoomでご参加の皆さま方、いかがでしょうか。

C：すいません。

横井：どうぞ、Cさん。

C：『百五十年史』のデジタル化のことについて、ご説明をお願いしたいと思います。

横井：分かりました。小林先生、お願いします。

小林：ありがとうございます。恐らく、私の記憶が定かかどうであれですけど、2015年の時にもやはりそういったご意見、何人かの方からいただいたかと思ひます。もちろんその時には、私は、なんの責任もない立場でしたので、それ以上、ご返答できていないのですけれども、ただおおむね、その時にも、そのような趣旨のことは申したかと思うのですが、『百五十年史』編纂過程で、まず基本的な事実、今の基本データもそうですし、年表もそうですが、基本的な事実の積み重ねを一次資料でしていくと。できる限りそれに、より正確な情報を元に、新しい記述、通史を作成するというのが、この『百五十年史』の目標です。そのことによって得られたデータですとか知見を、どのような形で副産物として、例えば編纂室が解散した後でも、社史だとか、女子大の史料センターは存続しますので、そういったところでどのように活用されるか。あるいは第一部門研究会で活用されるかというのは、全く、ある意味で自由にご活用いただいて、何て言ひますか、使いやすい工夫

をしていただければと思いますので、ぜひまたそういった時にご意見をいただければと思います。ありがとうございます。

C：今のご説明では、デジタル化について、どうするかということについて、理解がしにくかったのですが、もう一度お願いします。

小林：出来上がったもののデジタルデータは編纂室としてきちんと確保していきますので、それをどのように使いやすく活用していくかというのは、恐らく次の段階になるかなと思っております。

横井：よろしいでしょうか。他に何か……。

B：横井先生、よろしいでしょうか。

横井：Bさん、お願いします。

B：今度の150周年の募金金額はいかほどでしょうか。そして、その募金についての提言と言うか、考えを述べさせてもらえたらと思うのです。新島襄がラットランドで5,000ドルの寄付をいただいて、同志社が生まれて。新島がいわゆる吉野の山林王、土倉庄三郎から5,000円の寄付、それは今で言うところと5,000万円ということですかね。寄付をと述べられて、大学設立運動にまい進していく。社史資料センターがハリス理化学館で書の展示をさせて、初めて見たものがあります。それは徳富蘇峰が勝海舟に、ここに書いてくれと依頼した、「彼等は世より取らんとす、我等は世に与えんと欲す」という、新島の生き方をよく表したその言葉を書いて、それがなんと4mから5mぐらいあるのですかね。入りきらないので折りたたんであったのですが、この150周年に向けて、大学図書館も新しく改築されるということも、ちらっと聞きましたけども、多額の募金を集めるためには、これは新島先生の生き方、「我等は世に与えんと欲す」という、この大きなほりを、1m50cmか2mぐらいのミニチュアにして、募金を訴える時には、絶えず新島先生がここにいると、皆さん、同志社から与えられた多くの喜びというか、恵みに感謝する恩返しの時であるということ、そういうものを置いて募金を訴えたら、きっとインパクトがあるのではないかなと、八田総長にも校友会京都支部の時にお会いして、そんなことを申したのです。どれぐらいの募金額を考えているのか。またそして、それについてのアイデアというか、何かあったら教えていただけたらと思いますけども。

横井：今回の150周年記念事業の募金でよろしいでしょうか。

B：はい。

横井：平野事務長、分かりますかね。お願いします。

平野：150周年の平野です。大学がされている ALL DOSHISHA 募金は50億円なのですけれども、**B** さんのご質問は学校法人同志社としての、同志社創立150周年記念事業募金と理解しました。募金金額は10億円ということを目標としております。実際になかなか、この同志社創立150周年記念事業募金そのものを行っているということが、まだまだ十分に周知できていないのですけれども、現在、同志社創立150周年記念事業募金のPRをしております。一つの目標としては今出川キャンパスの良心碑を今、2022年度、2023年度にかけて整備しようとしております。

募金の顕彰の話になるのですけれども、30万円以上の方の募金の顕彰、お名前の顕彰ですね。整備された今出川キャンパスの良心碑の周りに置くことによって、この150周年記念事業へ協力いただいた皆さんへの感謝を示したいなと思っております。大学の方の ALL DOSHISHA 募金の方は10万円以上で、良心館内の寄付者銘板に氏名（プレート）が掲載されるそうです。以上です。

横井：ありがとうございます。今、またチャットの方にご質問というかご提案がありましたので、お伝えしたいと思います。『百五十年史』のデジタル化の課題については、メタバースを取り入れるなど、電通の協力等を含めて、同志社の大学としての先進性を示すような構想も検討いただきたいと思いますとのことです。小林先生、いかがでしょうか。

小林：ぜひそういうプロジェクトをご検討いただければと思います。

横井：よろしく申し上げます。また電通さんもお協力お願いできればと思います。

長瀬：VR（バーチャルリアリティー）とメタバースでちょっとまた違うもので、今、150周年プロジェクトチームの方で動かれている、VRというのは学内キャンパスをデジタル化して、閲覧できるようにしようというお話をいただいていると思うのですけれども、今、ご質問のあったメタバースというのは、バーチャルリアリティーの世界に人を導入させて、その中でコミ

コミュニケーションをとろうという話なので、トレンドではありますし、できる限りのところでそういうことができたらいかなとは思っています。

横井：ありがとうございます。そうしたら会場の E さんから挙手がありますので、お聞きしたいと思います。お願いいたします。

E：小林先生に質問いたします。ご発表の中で、『百五十年史』編纂のためにちゃんと部屋を設け、専任のスタッフを置いたということなのですが、人数と言いますか、定員を教えてください。そして具体的に何をなさっていて、その成果が表れているのかどうか、途中経過で結構です。プラスして、社史資料センターにいらっしゃる 3 人の社史資料調査員が、この『百五十年史』にどういう関わりをもたれているのか。完全に分離して、3 人は日常業務、『百五十年史』の方はもう専任のスタッフ。有終館でしたかね。そう分けているのかどうか。その辺りをお聞かせください。

小林：ありがとうございます。実務上のいろいろご苦勞は、現場ではあるとお聞きしておりますけれども、おおむね悴組みみたいところをご説明させていただきたいと思います。『百五十年史』の編纂事業をスタートするにあたって、やはり一番そこが悩ましいところで、簡単に言えば社史資料センターというものが既にあるから、そこでやったらいいのではないかというご意見も当然ありました。それでしたら、到底、私は全くそれには協力できないと思っておりましたので、きちんと編纂室を設ける。そのための専任スタッフを置くということが、逆に言うと私が編纂事業を本格的にスタートするときに、もし関わるとすればそうさせていただくということが条件みたいなものでした。つまり社史には社史としての本来業務。女子大には女子大の史料センターの本来業務がありますので、そこにはなるべくご迷惑をかけないような編纂室をスタートさせたいということです。もちろんそのように理想的にはいかない面ありますし、事務局では掛け持ちの部分もあって、大変ご負担をおかけしているのですが、そのような形でスタートをさせていただいております。

そのためには、三巻体制ということが一応、準備段階での構想としてありましたので、三巻に対して、それぞれ最低 2 人ずつのスタッフが必要なのではないかと、6 人程度という予算組みで、それをどう融通するかというの

は、恐らく中での工夫になると思うのですが、そのように進んできています。

既に進んでいる編集の作業もありますが、やはり調査活動が前提として大事ですので、先ほど申しましたような、京都新聞など学外における同志社関連資料の収集からスタートして、マイクロリーダープリンターの問題なども難航しているのですけれども、150周年の委員会の方にもご理解いただき、環境整備も進めていただいているところですので、この編纂事業に間に合わせて作業を進めていきたいという現状です。もし何かありましたら、また補足させていただきます。

E: 定員が6人で、現在、もう6人いらっしやると、そういうことですか。

小林: どうしても人数の問題で。

E: そして任期としては27年度ぐらいまでですか。

小林: ここも悩ましいのですが、こういったプロジェクトでお願いする職員の方は、任期が最大5年という枠組みの中でしていますので、編纂が完結前に退職を迎える方も当然いらっしやるということです。ですからそこが、私としても一番、心苦しいところですし、こういうところですからざっくばらんに言うと、何とかならないか。6年、7年と続けていてもらえないかなという、これは個人的な希望なのですが、大きな壁があるのではないかなと思っております。

横井: ありがとうございます。今、メッセージの方で、よい研修の時をありがとうございますというチャットもいただきました。ありがとうございます。他にございますでしょうか。会場の方で、太田事務長の方から挙手がありました。

太田: すみません。社史資料センターの太田です。長瀬さんに質問させていただきたいのですけれども、この Future Vision と Challenge ですけども、これはキーコンセプトと考えさせていただいてよろしいのでしょうか。すなわちこの Future Vision と Challenge に基づいて、これから事業を展開していくかという、そういうことなんでしょうか。

長瀬: 今のご質問に関しては、基本的にはキーコンセプトとしてお考えいただきたいと思うのですが、ただ150周年に向けて動くいろいろな施策

が、方向性が定まらない中、やっけてしまっていくと、これ、なんのためのイベントでしたっけという話になってくると思うのですね。なので、なるべく、そこに関しては Future Vision だったり、Challenge に基づいた方向で合わせていった方が、1 個、1 個、規模が小さな施策であっても、集合体となれば大きく見えるというコンセプトにもなり、そうしていただいた方がいいかなと思いますし、幸い、今、150 周年記念事業事務室の方に来ている企画案だったりとか、プロジェクトチームの皆さん、考えていらっしゃるということのは、おおよそ Challenge の内容に、どこかしら、ひも付くものであるものが大半ですので、そこに関しては大きな齟齬はないかなとは思っております。

横井：よろしいでしょうか。Challenge に基づいた実際のプロジェクトというものも企画が進んでおりますので、ご期待いただければと思います。他いかがでしょうか。C さん、どうぞ。

C：度々で恐縮ですが、今の関連でお願いをしたいと思います。この Challenge とか Future Vision の成果物は、あくまでもメンバーによって作り上げたものであって、電通さんはあくまでもファシリテーター、黒子という存在だと聞きましたけれど、電通さんが作ったという話を耳にしたことがあります。それでは残念ですので、これについては当局も、また電通としても、同志社のメンバーが作り上げたというスタンスと公表でお願いをして、電通さんの名前が出ないように、また出さずともいいと思っておりますので、その点についてご意見を聞かせていただきたいと思っております。

横井：よろしいですか。お願いします。

長瀬：今、C さんがおっしゃるとおりだとは思っています。結局、こういった話というのは、外部の人間が作るべきものではないですよ。たぶん、すごく小さなコミュニティーで考えると、家族の中の話は、やっぱり家族の中で決めるべきことであって、外部の人間がその家庭内ルールを決めるというのは、おかしな話だと思います。これと全く同じことであって、やっぱり同志社の中の話というのは、同志社のインナーの方々が考えて、作って、発信していくということが基本的に大事なことだと思っています。なので、いわゆる第三者である電通が外からの立場として作って、それを発信してくれと

か、発信するというのは間違っただことだと思っていますし、もともとわれわれが当初、プレゼンさせていただいた内容も、基本的には今、Cさんがご認識のとおりでございまして、電通はあくまでも黒子で、同志社が主体的に動いていて、そのお手伝いをさせていただきますという形でご提案をさせていただいております。ですので、電通が作ったと、もしもお聞きになっていたとすると、たぶんそれをおっしゃった方が少し誤解をされているのではないかなとは思いますが。

横井：私もプロジェクトの代表をしておりますので、付け加えさせていただきますと、ちょうど1年ぐらい前になりますでしょうか。先ほどの長瀬さんのご報告の中に、写真も映っておりましたが、コロナ禍でありましたので、合宿という形は取れませんでした。2日間にわたってワークショップを開催して、その中でプロジェクトのメンバーが意見を出し合いながら、2チームに分かれていろいろと議論しながら抽出していったものが基本になっていて、そこから Future Vision というものにまとめあげられてきたという経過があります。

さらにこちらで決めたものでも、先ほど少しお話ししましたが、同志社創立150周年記念事業委員会、幹事会での審議ですとか、注文ですとか、いろいろなものを踏まえてまとめましたので、かなりこれには時間がかかって、またそれぞれの立場で、それぞれの意見などを反映させながらまとめてきたところであるのご理解いただければと思います。

ありがとうございました。後から考えると、本当にわれわれとしても、プロポーザルの際には実は、一番、面倒と言ったら言い方が悪いですが、どうしても丸投げっぽい感じのところが多い中、電通さんのご提案はそうではなかったというところ、そういうところもきっとお願いすることに至った、一つの要因ではないかなと理解しているところです。

C：ありがとうございました。電通さんを使おうと意志決定された事務局の謙虚さには頭が下がりますし、先ほどの長瀬さんの、電通さんのお話が大変、納得しました。ありがとうございました。

横井：ありがとうございました。他、いかがでしょうか。残り10分ほどとなってまいりました。よろしいですか。そうしましたら、残りわずかとなって

きましたので、今日、ご発表いただいた、石川先生はもうご退席なされましたでしょうかね。石川先生、ちょっとご体調が悪いということでしたら、何かご発表いただいた皆さんで、ぜひこの150周年記念事業に向けて、この第一部門研究のメンバーの皆さんにアピールと言いましょか、あるいはお願いと言いましょか、そういったことがありましたら、一言ずつお願いできたらと思いますが、いかがでしょうか。そうしましたら石川眞弓先生、もうご退席なさっていますかね。

石川：いえ、おります。

横井：石川先生、まずいかがでしょう。かるたの件でもよろしいですし、もう既に新しいプロジェクトなど立ち上げていらっしゃったら、そういうことでも構いませんが。

石川：今、2年目に、またメンバーにさせていただきましたので、また次のことは、頭にはありますけれども、かるたはもう本当に自信作で、私1人が作ったわけではもちろんなくて、本当にいろいろな方のご協力できあがったものなのですが、本当に素晴らしいものになっているという、そういう意味で大変な自信作ですので、ぜひともお買い上げいただきたいと言うと、ちょっと商売みたいになりますけれども、手に取って見ていただきたいですし、少しでも、1人でも多くの方に、こういうかるたがあるよということをお伝えいただければ幸いです。以上です。

横井：ありがとうございます。

C：かるたのことでちょっと。

横井：どうぞ。

C：とても素晴らしいかるたが出来上がりまして、良かったと思っております。それで、もうあそこまでできましたので、いまさらという感じがございますけど、『ん』というものが無いわけです。これについては議論があったと思いますけれど、私は運を引き寄せた新島襄というものを『ん』にこじつけないと思います。本当は『うん』になるのですが、『ん』として運を引き寄せた新島襄と。

石川：それは議論とかいう前に、全然、思い付きもしませんでした。

C：やはり『ん』がないのかというのは、絶対、生徒さんからも出てきそう

な気がしますので。

石川：もし、夢のような話ですけど、第2版が出るようなことがありましたら、それはまた事務局の方にご相談したいと思います。

C：そうですか。それと、本井先生のご説明はとても精緻で、凝縮されたものなので、それを十分に説明された、指導手引書みたいなものをご提案したいと思います。以上です。

石川：ありがとうございます。

横井：ありがとうございます。それでは続いて森田先生、お願いいたします。

森田：ありがとうございます。今、かるたのお話があったので、私も。あのかるた、生協ショップでも売っていました。買って、家に持って帰って、4歳と8歳の子どもとやりましたけども、4歳の子どもが、顔の大きなホルランドの絵が大好きで、あれが出るたびに大笑いという感じで、親しんでやっていますので、何か子どもたちもそうですし、私が大学でもっている授業とか、大規模クラスが多いので、あれを、数をそろえて、250人ですするというのも、なかなか難しいですけども、何かそういう、授業なんかに取り入れても面白いかなと思ったりします。

150周年記念事業はいくつか、新たに走ろうというところにありますけれども、いずれにしてもいろいろなご意見いただきましたが、同志社の礎はどこにあったのだろうということを、この150周年にもう一回、確認した上で、同志社大学、同志社というのは学校法人としては本当に大きい学校なので、学校としてはこれから残っていくと思いますけども、その建学の精神であったり、創立者の思いというものが残った形で残っていくのかというのは、本当にこれから残りますと簡単に言えることではないと思うのですね。ですので、持続可能な形で、建学の精神に立った学校として立っていくために何をすべきかという観点で、この150周年という時を、私も皆さんと一緒に過ごさせていただきたいと思っています。以上です。

横井：ありがとうございます。小林先生、いかがでしょうか。

小林：たくさんのご質問ありがとうございます。こうした機会を与えていただきまして、本当にありがとうございました。ただ、最初に申しましたよ

うに、今まだ大事業の、胸突き八丁にさしかかってもいないぐらいの、途中の段階ですので、そういう意味ではまだ具体性のあるご報告ができなくて大変申し訳なかったのですが、また来年、再来年、どこかで機会をいただければ、また、私でなくても、他の委員からご説明させていただけると思います。

またご質問の中にもありましたように、資料提供などはいつでも、こちらは望んでおりますし、恐らく、ここにいらっしゃる方にも、ご参加の方にも執筆をお願いする場面なども、ご無理をお願いする場面なども出てくるかもしれませんので、その時にはぜひともご協力いただければと思っております。ありがとうございました。

横井：ありがとうございました。長瀬さん、いかがでしょうか。

長瀬：今日、こういう貴重な場にお招きいただきましてありがとうございました。まだ2025年はちょっと先な感じもするので、長い道のりにはなるとは思いますけれども、引き続きお手伝いさせていただければと思います。本日はありがとうございました。

横井：残り時間もあと5分となりましたが、よろしいでしょうか。Zoomでご参加の皆さま、よろしいでしょうか。ありがとうございました。